

設楽発掘通信

No.48
令和元年
7月号

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の地元説明会

を開催します

愛知県埋蔵文化財センターは今年度六月より、川向地区の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査を行ってまいりました。上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の本調査が実施されるのは今回初めてですが、これまでに縄文時代前期から中期（約七千年前～四千五百年前）と思われる**竪穴建物跡**や**土器**、**打製石斧**や**石錘**などの石器が出土しています。

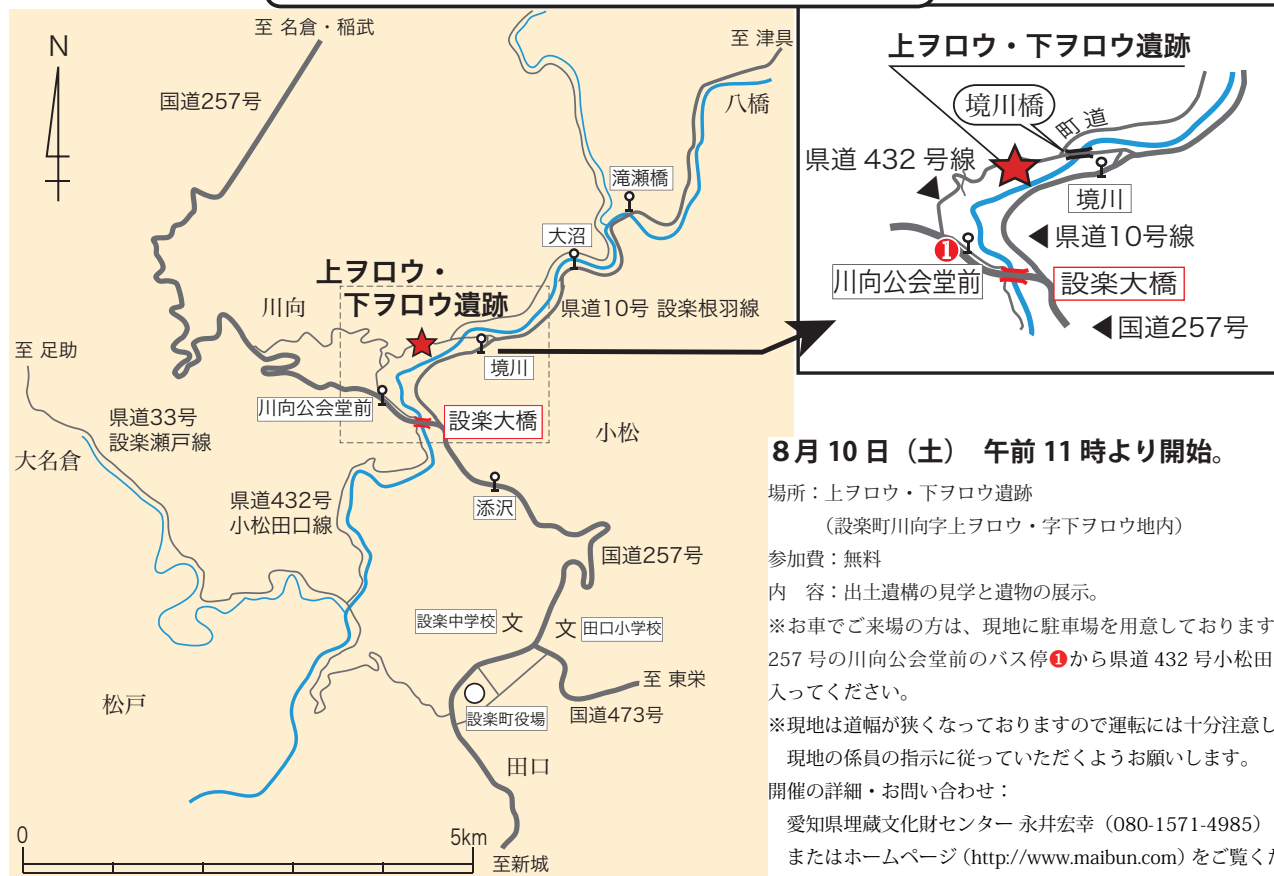
つきましては、八月十日（土）午前十一時より、地元説明会を開催いたします。詳細につきましては、下記のとおりですので、皆様ふるってご来場ください。

（愛知県埋蔵文化財センター 宮腰健司）



写真1 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査風景

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 地元説明会のご案内



上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査が始まりました

六月より開始した上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査は現在、遺構検出と遺構掘削の真っ最中です（写真2）。

調査開始まもなく、機械掘削を進めていくと大きな礫を含む堆積層が顔を見せ始めました。ゴツゴツした大礫の堆積層は、調査区の中央を大きく北から南へ縦断するようです。土石流の痕跡です。東西幅十〜三十m前後、深さはまだわかりませんが、土石流は大きく蛇行しながら遺跡を南北方向に削平しています。この土石流の削平が及ばなかった地点に縄文時代を中心とする遺構が見つかっています。

遺構の見つかった場所は大きく分けて二ヶ所です。調査区の中央で見つかった土石流を挟んで東寄りと西寄りです。東寄りでは、調査区南東付近に円形の竪穴建物跡二棟と方形の竪穴建物跡が三棟重なっていました。検出時に出土した土器から縄文時代中期（約五千五百年前〜四千五百年前）の可能性があります。一方、西寄りでは調査区の中ほどで縄文時代前期から中期（約七千年前〜四千五百年前）の二×三m前後の方形の竪穴建物跡が五棟以上、少しずつ重なりながら一ヶ所に



写真2 遺構掘削状況

集中して見つかっています（写真3）。これらの竪穴建物跡の近辺から、縄文時代中期と考えられる土器の把手の一部が出土しました（写真4）。これらの建物跡は当時の集落の一部だと思われます。過去の設案ダム関連調査では、縄文時代前期の遺構と遺物は少なく、今後の調査に期待されます。

（愛知県埋蔵文化財センター 永井宏幸）



写真3 遺構検出状況（調査区の西寄り）



写真4 縄文土器の把手

石原遺跡の発掘調査が始まりました

六月から石原遺跡の発掘調査が始まりました。今年度の調査対象区は町道北側の一九A区、町道南東側の一九B区、町道南西側の一九C区です。

まずは町道北側の斜面地である一九A区から調査を開始しました。調査直前の地形は、石積みで区画された数段の平場があり、最近まで畑や住宅地に利用されていた場所です。調査により、ここが大規模な土石流に繰り返し覆われてきたことがわかりました。地表から一〜五m下で安定的に広がる礫混じりの黒色土層も近世以降に埋まったと考えられます。さらにそこから、二・五mほどの深さで（時期は確定できませんが）より古い段階の黒色土層を確認しました。この黒色土層および土石流堆積層には縄文時代晩期（今から約三千年前）の土器片や安山岩や黒曜石の剥片、安山岩の礫片などが混じっていました。これらの遺物は、縁辺が摩滅していたり、傷付いていたりしていることから、丘陵のさらに上位から土石流によって、運ばれてきたものと考えられます。このことから、丘陵の上部に、縄文時代晩期の生活域があったと考えられます。

残りの調査区、一九B区と一九C区では、昨年度調査区で検出された遺構や遺物が展開されると予想されるため、今後の調査成果にご期待ください。

（愛知県埋蔵文化財センター 田中 良）



写真5 19A区表土掘削状況



写真6 19A区調査状況



写真7 発掘調査状況



写真8 遺構検出状況

万瀬遺跡の調査が始まりました

六月十七日から万瀬遺跡での発掘調査が始まりました。現在は遺跡の中でも西側の、山の斜面に近い部分を調査しています。表土と呼ばれる、今の地表面に近い土を重機（バックホウ）によって除き、その下の遺物が含まれると予想される層まで掘り下げ、遺構と呼ばれるかつての建物などの痕跡を探す作業を行っています。

調査前は林の端に当たる所であったため、木の根によって地面が攪乱されているところも多く、なかなか遺構は見つかりません。ただし、近くに石垣があるため、何らかの利用はされてきたようです。そうした環境の中で、遺物がぼつぼつと見つけられ始めています。

現在までに見つかった遺物は主に陶磁器の破片が多く、それらはおそらく近世以降のもので、古いものでは古瀬戸と呼ばれる室町時代の焼きものの破片が一点出土しています。

現場では重機と共に作業員の方々が作業に臨んでいます。これから夏にかけて暑くなつていきますが、調査はこれから本番です。成果を挙げられるよう、安全と健康管理に気を配って調査を進めてまいりますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

（愛知県埋蔵文化財センター 河嶋優輝）

西地・東地遺跡出土の耳飾り

大名倉地区の西地・東地遺跡からは、これまでの発掘調査で、縄文時代の耳飾りが二点出土しています。この紙面でご紹介したいと思います。

図1は、全体の四分の一度程度しか残っていませんが、もとの形をおおよそ推定することはできません。直径4cm程度の扁平な円盤に近いもので、身部中央に向かって、深い切れ込みを入れたものと考えられます。滑石といわれる石材で作られており、表面には磨かれた痕や切れ込みを入れる際の擦り切りの痕が認められます。

これは、玦状耳飾りと言われているもので、名前の由来は、古代中国の玉器のひとつである、「玦」に形が似ていることによります。この種類の耳飾りは、日本列島では縄文時代前期（今から約七千年前以降）に多く認められるほか、朝鮮半島や中国大陸にもあり、東アジア一帯での出土が知られています。設楽町近隣では、豊田市の西檜尾町大麦田遺跡や新城市の石座神社遺跡でも出土しています。福井県あわら市桑野遺跡では、お墓と考えられる土坑の中で、頭部（耳部）と推定される位置から対で出土する事例が報告されており、出土状況からも耳飾りであったことが分かります。この石製の耳飾りは、男女ともに使われていたものではないかと考えられています。

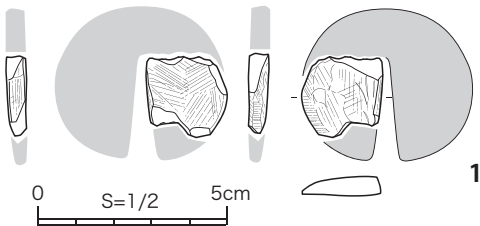


図1 西地・東地遺跡出土 玦状耳飾り

一方、図2は全体の二分の一度程度が残っており、全形が復元できるものです。径4cm、高さ2.5cm程度の輪のような形をしています。表面は丁寧に整えられています。端部や内面には、刻みや粘土の貼り付けによる装飾が施されており、特に内面の装飾は極めてキレイに仕上げられています。これは滑車形耳飾りと言われるものです。この種類の耳飾りは、縄文時代後期後半以降、晩期前半にかけて（今から約三千五百年前から三千年前頃）、日本列島各地で発達したものです。長野県松本市のエリ穴遺跡など、信州や北関東地域では一遺跡から多量に出土する場合も知られています。西地・東地遺跡の事例

はこの一点のみですが、胎土が極めて洗練されており、東日本地域からもたらされたものようです。この耳飾りは主に女性が着けていたと考えられ、耳たぶに装着された様子（図3）は土偶にも表現されています。このように、これまでの発掘調査によって、当時の生活・風習を考

上から

横から

内面と断面

下から



図2 西地・東地遺跡出土 滑車形耳飾り

える上で、興味深い資料が明らかになりました。（愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁）

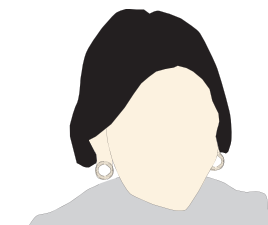


図3 滑車形耳飾り装着想定図

設楽発掘通信

No.48

令和元年7月号

編集・発行

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

* 次号は9月の発行になります

印刷・協力

株式会社イビソク